

高津 翼：公開シンポジウム「アマモ場の生態と回復」参加記

平成15年3月29日(土)、三重大学で行われた日本藻類学会第27回大会のイベントとして「アマモ場の生態と回復」をテーマとした公開シンポジウムが開催されました。参加者は147人で見込み通りの人数とのことでした。公開ということで藻類学会会員以外の方も当シンポジウムのために全国各地から集まり、アマモへの関心の高さが伺われました。しかし、日程の都合上、藻類学会大会の口頭発表と並行して行われたため、単独で行われた場合には、より多くの方が参加できたと思います。

私は3年前からアマモ場の調査をする機会が多くなりました。しかし、見てきたアマモ場は限られた海域であるため、当シンポジウムで各地のアマモ場の話を聞けることを楽しみにしていました。その期待通り地域的には北日本から熱帯域そして海外の事例まで、内容的には概論、生理生態、造成事例、そしてアマモ場との関わりなど、テーマがアマモに限られていながら盛りだくさんの内容でした。

講演は向井宏氏(北海道大)「アマモ場の生態系の概要」、仲岡雅裕氏(千葉大)「アマモ場の生物群集とその多様性」、田中法生氏(国立科学博物館)「アマモの遺伝子多様性研究の現状」、阿部真比古氏(三重大)「アマモの温度、光特性」、本多正樹氏(電中研)「アマモ場の生産力推定技術」、中村洋平氏(東京大)「サンゴ礁海草藻場と魚類の係わり」、玉置仁氏(広島大)「アメリカにおける藻場造成の現状」、和泉安洋氏(徳島農水部)「アマモ場造成試験地の5年間のモニタリング」、尾田正氏(岡山水試)「アマモ場回復を組み込んだ沿岸域利用計画」、敷田麻実氏(金沢工大)「藻場を中心とした浅海生態系の管理方式の検討」の10件でした。

アマモ場の概論及び状況については向井さん、仲岡さん、中村さん、アマモ種の生理生態研究については田中さん、阿部さん、本多さん、アマモ場造成については玉置さん、和泉さん、尾田さん、アマモ場との関わりについては仲岡さん、敷田さんがそれぞれ講演されました。また、藻類学会大会においても当シンポジウム開催を機会に今までは肩身の狭かったアマモなど海草に関する研究発表が過去の大会に比べて多く発表され、私も15分の時間を頂きました。

今回のテーマの中でもアマモの生態は多方面からの研究が進み、かなり解明されてきたと思います。しかし、アマモ場の回復は部分的には可能であっても全国的な回復には長い道のりがあると思います。アマモ場はこの50年で大幅に減少し、各種藻場の中でも最も深刻な状況にあると思います。その要因は「(1)浅海域の埋め立てによる場の喪失 (2)濁りによる光量の減少 (3)気温の上昇に伴う内湾域の水温上昇 (4)漁業の動力化による海底の掘り起こし」などが考えられます。(1)については最近ではアマモ場の引っ越しをさせて場を再生させる例がありますが、喪失量に比べて再生量は微々たるものです。(2)については阿部さんが今回光量に対するアマ

モの生育限界を示したことで、今後回復に役立てられると思います。工事費は少なくないと思いますが、尾田さんが示した海底面の嵩上げによりアマモ場は回復できるようです。(3)についても阿部さんが温度に対する生育限界を示しましたが、水温がアマモなど一生物の生育限界を超えてしまった海域で、水温を下げることは事実上不可能です。(4)については一部の漁協では自主的に漁業規制を行ってアマモ場を保護していますが、アマモのために第三者が強制的に漁業規制を行うことは困難です。このような厳しい現状の中で期待されるアマモ場回復方法の一つは和泉さんの示された天然のアマモが点在するが、砂面が微妙に変動するためにアマモが場としては広がらない海域において、安価な方法で砂面変動を抑制する方法です。しかし、条件に合う海域は限られており、その限られた海域でも困難は待ち受けているようです。以上のように今後も課題は残りますが、今回のテーマからもアマモ場回復方法を確立する材料は揃いつつあります。適地選定については玉置さんが紹介した米国のモデルは国内でも応用できると思います。そして確立されるアマモ場回復方法の中には敷田さんの示したモニタリングを続けながら順応的に管理するシステムを常識化させることがアマモ場回復への近道であると思います。

シンポジウム終了後、懇親会が近くの居酒屋で行われ33名が参加しました。その席上、オーガナイザーの前川教授より当シンポジウムの講演内容等を藻類学会誌に掲載したいので一報として執筆してほしいとの話がありました。講演内容は書面で見直したい場面が多かったため、書面で発行されるのは楽しみです。また、当シンポジウムはビデオ販売されるので、是非復習させて頂こうと思っております。

(芙蓉海洋開発㈱)



写真2. シンポジウム会場